

河野哲也著

『暴走する脳科学』

—哲学・倫理学からの批判的検討—

光文社新書 2008 年 新書版 216 頁 ¥740(税別)

福士侑生

脳トレや脳開発といった教育への脳科学分野からのアプローチが盛況を博す今日、脳科学の社会的影響の倫理的な問題についての議論もまた行われなければならない。なぜなら「近代社会においてテクノロジーは、それ自身が一つの重大な権力であり、多くの領域において、政治システムそれ自身より科学技術の方が大きな力を持っている」(p.176)からだ。本書は、脳科学という科学技術の姿を借りた権力に、哲学という一般市民の学問の立場から、するどく吟味のメスを入れている。

著者の主張とは、簡潔に述べれば脳科学が心理主義と同じ轍を踏むことへの危惧である。心理主義とは、あらゆる問題を内面の問題として取り扱い、内面を改変することで解決しようとする傾向をさす。この心理主義の問題は「自分の目の前にある困難を生じさせたのが自分の心理（態度、性格、考え方など）であると考え、その心理を生じさせている環境因、とくに人間関係的・社会的・政治的な状況に目が向かないこと」(p.200)つまり、社会環境は状態を維持し、個人にそこへの適応を求めることである。

たとえば、ブレインマシン・インターフェースという例がある。人間の脳とコンピュータを接続し、記憶力や数学的能力を向上させるとうたうウォーリック教授に対し、コロストは「人間を物扱いするかのよう」と批判する。なぜなら数学的能力を向上させるのであれば、少数制にしたり、教員の数を増やすという選択肢もあるからである。安易にブレインマシン・インターフェースによって人間の側を改変することは、「不備な教育プログラム、能力不足の教員、誠意のない行政、理解のない〈健常者〉たちに免罪符を与えてしまう」

(p.205) ことになりかねない。

さきの例もそうだが、脳機能研究を基調として教育へ応用される際、教育とは、環境からの刺激で中枢神経回路を構築することである、と理解される傾向がある。しかしそのような理解では、教育とは、学習者の脳の内部に知識やスキルを構築することになる。知識を一種のモノとして捉え、それを学習者に効率よく注入させる、旧来より批判されている詰め込み教育の図式が再生産されてしまうのである。批判的思考、知識とは共同で生成され共有されるものであるという考え、そして教育自身が現実に対して働きかけるといった民主主義的教育には不可欠な要素を見過ごしてしまう可能性がある、と、著者はこのような態度をするべく批判する。「管理主義的な発想から生み出された脳テクノロジーが心理主義に陥ることは必然である」(p.206)。

では脳科学が心理主義に陥らないためにはどうすればよいのだろうか。

代わる新しい心の概念として、著者は「拡張した心」を提案する。ひとことでいえば身体性と環境との関係によって心を理解することである。心とは内面的なものではなく、外界へと向かう志向性と捉え、それを有するには外界とかわるための身体が必要になる。そのなかで「脳は、環境と身体のシステムに部分として組み込まれ、その範囲において全体に影響を及ぼすことができる」(p.208)ものとして、あくまで環境との対で考えることで、心理主義との決別を図るのである。

脳テクノロジーが脳に働きかけることで個体をコントロールすることが可能である以上、私たちは誰が、誰を、何のためにコントロールするのか見定めなければならない。科学技術は私たちの生活をより良くするための、人類共同・共有の知である。そのリテラシー教育のための有用な一冊として、皆さまにおすすめしたい。